

函館港改良工事及び船入潤防波堤の価値

評価軸	価値の内容
【技術】 ■北海道における最初の近代港湾構造物	
年代の早さ	・日本人製作の港湾コンクリートブロックでは最初期のもの。（函館港改良工事は明治29(1896)年6月着工、明治32年4月竣工）
規模の大きさ	・改良工事全体では、コンクリートブロックと石積による防波堤及び護岸延長は約1km、コンクリートブロックは3,700個余りを使用。防波堤としても100m以上が現存。
技術力の高さ	・石積みとコンクリートを複合的（練積み、空積み、ブロック、目地等）に使用し、波による圧搾空気を空積みで抜く工法の採用など、当時他にない特殊な構造。 ・コンクリートやセメントに関する各種の試験を実施(M27、M30)。それを踏まえて施工方法を検討し、工事を実施。 ・上記の調査・計画、各種試験、施工方法等を詳細に記した複数の報文の存在。
珍しさ、典型性	・当時利用実績が少なく高価なセメントを事業全体に使用。 ・石材の多くは弁天岬台場の石材を再利用。コンクリートブロックは旧弁天岬台場内で製作。灯台はレールを芯として現地施工した鉄筋コンクリートの嚆矢的な構造。
【意匠】 ■石積み防波堤特有の風格と近代港湾の幕開けを感じさせる形状（景観と機能との調和）	
様式	・江戸時代の土木技術の主流である石積みと、(本格的利用から間もない)コンクリートを導入した近代土木技術を融合した構造物。
デザイン	・石畳を思わせる小段とそこに配置された係船石。西洋式の高塔型灯台を模した小型の灯台。複数の石質が存在による独特な風合い(模様)を形成。
周辺景観との調和	・イカ釣り漁船や函館山と一体となった地域固有の景観を形成。 ・堤頭部は構造的にも考慮され、かつ門構えのような風格を有する形状。
【系譜】 ■廣井勇が調査から監督まで手がけた最初の港湾構造物	
地域性	・函館港内の静穏度確保と市街地造成を兼ねた埋立事業。当時高価だったセメントを地場（上磯）産とすることで、価格を2割近く抑制。
土木事業上の位置づけ	・函館区営による函館港改良工事に始まった近代港湾としての函館港整備は、その後に確実に引き継がれ、我が国有数の港町を形成。
故事来歴	・国際貿易港として安政6(1859)年に開港した函館において、我が国の近代化が波に乗り始めた時代を代表する事業。幕末に五稜郭とともに築造され戊辰戦争の舞台となった弁天岬台場で使用されていた石材を再利用。
地元愛着度	・都市型漁港として地域に馴染み、交流型漁港への期待。函館の歴史的風土を守る会による“市民の記憶に引き継がれる原風景”に選定(H14)。
保存状態	・防波堤は、ほぼ竣工当時の姿で残存し、堤体自体の不陸も見られず、現役の防波堤として機能。